

トップインタビュー(第4回)

社長は悪人でも務まる。利益を出す力があれば

2015.07.17

トリンプ・インターナショナル・ジャパン元社長 吉越浩一郎氏



(写真/鈴木愛子)

かつてトリンプ・インターナショナル・ジャパンを19期連続増収増益に導いた吉越浩一氏は「社長に崇高な人格など必須ではない。絶対に必要なのは、益を上げ続けることができる実。」と話す。こうした組織のトップに必要な、不可欠な要素を60の掟にまとめた『社長の掟』を出版している。吉越氏に「結果を出す社長の要件」を語ってもらった。

——ユニクロの、井正会長兼社長が役員会および部長会議で『社長の掟』を買って読むように」と社内に指示したとか。

吉越:「60の掟全てが世界標準の経営の原則であり、解するだけでなく、実践するように」と話してくださったそうです。素直に嬉しく思いました。

「何があっても利益を出す力」が絶対条件

——「掟」とはまた強い言葉ですね。

吉越:この本では、私自身の経営者人生を通して、組織のトップに、つたために必要な、不可欠と確信した要素を社長の掟として挙げました。あえて掟という強い言葉にしたのには、由があります。社長業では格好いいことばかりでなく、ときになりふり構わずやらなければならないことが多々ある。だから「心構え」とか「儀」といった優雅な言葉は、現実には合わないのです。

掟の一番目に、社長に唯一求められる能力を挙げました。何だか分かりますか。優れたコミュニケーション力か、豊かな教養か、それとも強いリーダーシップ、カリスマ性、国際感覚でしょうか。いずれも備わっているにこしたことはありませんが、違います。

トップに絶対的に必要なのは「何があっても、益を出し続ける実。」です。資本主義の基本原則は拡大再生産です。常に、益を出し、成長し続けるというのが企業の宿命だとすれば、社長はそれに無条件に責任を持たなければならない。さもないと下で働く社員が一番苦勞することになります。

この単純な事実は意外と見落されています。極端なことを言えば、合法的で倫理にかなった方法で会社の業績を伸ばすことさえできれば、スティーブ・ジョブズの言葉を挙げるまでもなく人格的に少々難ありでも構わないのです。

社外取締役の果たす役割が最近よく議論されていますが、スピードをとすことになる「会社の民主化」などはとんでもない話で、社外取締役がただ1つやるべきことは、売り上げを上げられない社長を徹にクビにすることだと思っています。

よく、景気だとか円高とか自分の、では変えられないこと、「与件」を言い訳にする経営者がいます。それを口にした時点で社長としては無条件に失格ということです。

デッドラインの設定が社員のやる気を引き出す… 続きを読む